

# “平和、不再戦”の誓い新たに

## 南京城壁保存修復協力事業 20 周年記念行事

### 日中の 400 人が集う

(公社)日中友好協会と中国人民対外友好協会、中日友好協会、江蘇省人民対外友好協会が主催する「南京城壁保存修復協力事業 20 周年記念行事」が 5 月 15 日、江蘇省南京市で盛大に行われた。日中双方から約 400 人が集まり、歴史的行事を振り返り、「日中平和」への誓いを新たにした。日本側は、協会代表団や 20 周年記念訪中団、日中友好大学生訪中団のほか、協会員を中心とした訪中団が全国各地から派遣され総勢 220 人余りが参加した。



20 周年記念式典の様相。5 月 15 日、南京中日友好会館・鐘山庁で

当日は雨天のため、午前中の記念式典は南京中日友好会館で開催された。式典には林怡・中国人民対外友好協会副会長、王秀雲・中日友好協会副会長、呉錫軍・江蘇省人民対外友好協会会長、儲永宏・南京市副市長ら要人多数が参加。日本側は、同事業を提唱した故平山郁夫・前(公社)日中友好協会会長夫人の平山美知子氏ら家族が参加した。会場には中国中央テレビの取材班が入るなどメディア関係者の姿が多く、式典の様子は国内のニュース番組で放送された。

また、日本側参加者の中には 20 年前に実際にレンガを運んで城壁修復に携わった人もおり、記念式典は、日中の学生も多く参加したため、城壁修復事業の精神を次の世代へと伝える機会としての役割も担った。記念式典で行われた主催者あいさつや日中の学生によるスピーチのからは、いずれの内容にも「歴史を正しく見ることが日中友好の基礎になる」との共通の思いがうかがえた。また、そのためにも「両国の民間交流を進めることが不可欠」との認識を参加者全員が共有する一体感のようなものが感じられた。開催地を代表し

てあいさつした儲永宏・南京市副市長は、日中協力事業によって南京城壁が修復されたことに感謝の意を表し、その上で「中日両国民、特に若い世代は手を携え共に発展できる互恵関係を築いていかなければならない」と述べ、民間交流の重要性を強調した。なお、会場の側壁には城壁修復事業を回顧する写真パネルと説明が展示され、参加者は熱心に閲覧した。



**呉錫軍**  
江蘇省人民対外友好協会会長  
のあいさつ

城南京城壁を修復する意義は文化遺産の保存にとどまらず、人々の良知を喚起し「前事不忘、后事之師」という言葉を実践し、戦争に反対する意志を固めた。

歴史を忘れる人は、過去から目を背ける人であり、罪を否定すれば、再び誤ちを犯しかねない。一部の軍国主義者が侵略戦争を起こしたからといって、その民族を憎むことはなく、責任は一部の軍国主義にあり、国民にはない。私たちはいかなる時も侵略者が犯した罪を忘れてはならず、侵略戦争の歴史を否定する態度や侵略戦争を美化する言動に対し断固として反対しなければならない。戦争を教訓にして初めて平和を求めることができる。

中日両国の若い友人たちには南京城壁にまつわる歴史を理解し、正しい歴史認識を持ち、世々代々にわたる友好・協力関係を築くことを期待したい。



**酒井哲夫**  
(公社)日中友好協会副会長のあいさつ

城壁修復事業が始まった1995年、当時の村山首相は「村山談話」を世界へ発表し、戦争において中国などアジア諸国に対し甚大な被害を与えたことに痛切な反省と心からのお詫びを申し上げた。この「村山談話」と平山郁夫前会長が提唱した城壁修復事業がいみじくも戦後50年の節目に言動されている。

日本が70年間、平和国家として歩んでこられたのも「村山談話」や平山前会長のご提案があったからだということを忘れてはならない。私たちはこの両者を軸にアジアと世界の平和と繁栄のために皆さまとともに努力を重ねていく決意である。

この後、南京大虐殺記念館を訪れ花を献じる。歴史を銘記し、平和を守り、友好を深め、未来を共に創る、という本行事の趣旨を心に刻み、犠牲者にお詫びを申し上げたい。「永久の日中友好、万歳、」。



**林怡**  
中国人民対外友好協会副会長のあいさつ

城壁修復協力事業に多大な精力と苦勞を払われた中日双方各界の皆さまに、心より敬意と感謝の気持ちを表したい。

近年、中日関係は非常に困難な局面に直面し、遠回りをしているが、両国関係を長期的に安定させる鍵は、歴史問題などの両国関係の政治基盤に関わる問題を適切に処理することにある。歴史はすでに発生した事実であり、それを質疑する余地もなく、否認することもできない。「過去を総括し、未来を切り開き、歴史を銘記し、再び戦争をしない」ことは、両国人民の共同願望である。

世界反ファシズム戦争および中国人民抗日戦争勝利70周年に当たる節目の年に、歴史を回顧するだけでなく、中日両国にとって、平和の重要性をさらに深く理解したい。平和友好は両国の唯一の正しい選択肢である。

## 南京大虐殺記念館で献花

記念式典後の 15 日午後、協会代表団をはじめとする日本側の参加者は南京大虐殺記念館を訪れ献花し、犠牲者に黙とうを捧げた。酒井哲夫副会長は「犠牲者に心からお詫びし、ご冥福をお祈りする」と述べ、日中両国の平和・友好に向けて民間交流をさらに進める決意を新たにしました。

一行はその後、同記念館を見学。酒井副会長は芳名録に「日中世代友好、世界永久和平」と記した。



黙とうを捧げる酒井(左)、橋本逸男両副会長

## 日中の学生代表が平和を誓うスピーチ

記念式典では日本と中国の双方の青年代表が平和を誓うスピーチを行った。日本側は学生代表の浅井まなさん(名古屋大 3 年)と範東洋彦さん(佐賀大 2 年)が、中国側は司夢潔さん(南京大大学院 1 年)と顧秋霞(東南大学 4 年)さんがそれぞれ日中両言語で発表した。



### (日本側)

私たち日中友好大学生訪中団は 18 歳から 24 歳の大学生までで構成されています。つまり、ほとんどが南京城壁修復事業の始まりと同じ時に生まれ、同じ時を生きてきました。

日中関係はこの 20 年でめまぐるしく変わり、関係の浮き沈みを皆がメディアなどを通じて感じています。

一方、中国から日本に来る中国人留学生と交流する、逆に日本を飛び出して中国に留学してみる、旅行や短期研修などを通じて中国の文化を感じに行く、というような大学生の姿は今では決して珍しくはありません。こうした学生たちの根底にあるものは、「お互いの文化を知りたい、学びたい」といった純粋な意欲です。

これからの日中関係の向上にはそうした私たち学生の純粋な相互理解が不可欠であり、それこそが、友好ひいては平和へとつながる近道だと考えます。

私たち学生と「同じ時」を歩む南京城壁。日中関係が今より発展し、南京城壁が私たちの輝かしい友好のシンボルとなり続けることを願っています。



#### (中国側)

戦禍に見まわれ、日本軍国主義の侵略者に蹂躪された南京は、70年の月日を経て、魅力と活力に満ちた国際都市に発展し、中日両国の民間交流の先頭に立ってきました。

そして、1995年に始まった中日友好協力による南京城壁修復活動は、20年を経て、両国の平和を愛する国民、特に青少年の間で“心のシンボル”になっています。

歴史を銘記することは、中日両国の友好と平和の前提であり、相互の理解と尊重は両国の友好の礎です。中国には「十年樹木、百年樹人（木を育てるには10年、人を育てるには100年かかる）」ということわざがあります。今、私たちはここに友好の種をまきました。この種は必ずや、中日の友好と平和を象徴する大きな木に育つと確信しています。先代から受け継いだ友好の伝統をしっかり守りつつ、共に手を携え、中日両国のすばらしい未来を創りあげることがここに誓います。

### 記念レセプション会場は“友好ムード”一色に

5月15日夜は記念式典と同じ会場で記念レセプションが行われた。

冒頭、呉錫軍・江蘇省人民対外友好協会会長のあいさつに続いて王秀雲・中日友好協会副会長があいさつし、「中日の青年たちが南京に集まり語り合う姿を目にし、大変うれしく思った。国の未来である青年は伝統を受け継ぎ、友好の種をまき続けてほしい」と期待した。さらに王

副会長は「私たち中日友好事業を進める団体は、この城壁修復事業を新たなスタートとし、協力をより深め、中日関係の改善と発展に向けてさらに貢

献しましょう」と会場の参加者たちに呼びかけた。一方、大学生訪中団団長としてあいさ



ステージに上り、日中の学生の輪に加わり手拍子をとる呉錫軍会長(中央)



つした小野寺喜一郎・協会常務理事は「私や、ここにいる大学生は俗にいう『戦争を知らない世代』である。歴史を引き継ぐ者として、今回の記念行事を通じ、改めて歴史を正しく見つめ、理解することの大切さを知った。これは何よりも大きな発見であり、未来への進化だ」と述べ、事業の精神を受け継ぐことの意義を強調した。



Kiroro の『未来へ』を日中両言語で交互に熱唱

乾杯後は、日中双方の参加者が和やかに歓談したほか、学生たちによる歌や踊りの多彩なパフォーマンスが次々と繰り広げられ会場を盛り上げた。

中国の若者にも人気がある日本の歌謡曲が日中合同で歌い上げられると、雰囲気は友好ムード一色に。中でも双方の学生が中国語の歌『朋友』を披露すると、呉会長や平山美知子前協会会長夫人、酒井哲夫・協会副会長らが相次いでステージに上って学生の輪の中に加わり、会場の熱気はピークに達した。参加者全員が手拍子とかけ声で応じ、一体感が生まれた。このほか、長野県の協会員が急きょアカペラで中国の歌『大海』を熱唱した。

南京城壁修復事業の20周年を祝うにふさわしい盛大なレセプションとなり、民間交流が作り出す「力」の大きさを感じさせた。